

2001年出土の木簡



- 1 所在地 石川県河北郡宇ノ気町指江
- 2 調査期間 一九九八年（平10）九月～一二月、一九九九年六月～二〇〇〇年一月
- 3 発掘機関 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 久田正弘・三谷正輝・大西顕・藤井秀明
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、河北潟を見下ろす丘陵裾部に位置する。遺構の主体は古墳時代後期～中世のもので

ある。調査は、圃場整備事

業の事前調査として行なつたもので、二年度に及び計六三〇〇m²を発掘した。発掘区はA～I区にわけたが、そのうちE区及びG区河道、そしてI区河道から木簡が出土した。E区及びG区の

石川・指江B遺跡

河道は同一のもので、幅五・五～一〇m深さ〇・五～〇・九mを測る。I区の河道はこれとは別で、幅三m深さ〇・三～一・五mの規模である。木簡は、E区河道一点（1）、G区河道から二点（2）（4）、I区河道から六点（5～10）出土している。木簡の年代は八世紀前半から一〇世紀前半である。墨書き土器は八世紀の「大宮」「小神」「羽咋郡」「□寺」「多真利」「夜乎」「倉人」「美奴丸」、九世紀～一〇世紀前半の「大」「吉」「家」に分かれる。

なお、古墳時代後期の遺物も多く、多量の祭祀関連遺物が出土している。遺跡の祭祀性は奈良・平安時代も引き継がれ多量の墨書き器、赤彩土師器が出土している。この時期はE・G区の谷筋とI区の谷筋で遺物の性格が神社系と寺院系に分かれしており興味深い。

E・G区河道

8 木簡の釈文・内容

(1) 「大国別社□□□略櫟祓集厄第□□佐□阿加□」

=□□田□□穗根

857×30×24 011

(2) 江沼臣□末呂事依而□
□一石在止母□□□

(190)×31×5 019

- (3) 「道□道郡部為□」
・「馬カ」
・「□□□人」

(168)×42×4 019
- (4) □□ □

(180)×(15)×4 059
- 一区河道

(2)は、裏面中央部分に長軸方向に細長くやや深いケズリが観察され、カットグラス状ケズリと想定される。「江沼臣□末呂が事に依りて……□□一石在りとも□」と読める。日本語の語順（「事依而」）や万葉仮名（「止母」）が使用されている点が注目される。
(3)は、「人」「道」といった同字が続くことから習書の可能性がある。

- (5) □□□□□□□□
- (6) 「▽磯鳴原」
82×18×3 032
- (7) 段百廿一
段七十九歩
(125)×66×15 019
- (155)×(17)×9 081

(6)は、下面には表面より刃物を入れたキリ・オリ技法の痕跡が明瞭に残る。沿岸部の地名が記載された付札木簡と推定される。

(7)は、田数が記されている。箱物などをするために、加工途中であつた材に記された可能性がある。

(9)は、横材である。

9 関係文献

- (8) 大
(69)×(33)×4 081
- (9) □ □ □ □
(10)×(162)×6 081
- (10) □□□□□□
・ □□□□□□
・ □□□□□□
(210)×(14)×5 081
- 新井重行「指江B遺跡出土一号木簡」（財石川県埋蔵文化財センター
「宇ノ氣町指江遺跡・指江B遺跡」一一〇〇一年）
湯川善一「指江B遺跡出土一～一〇号木簡」（同右）

（大西
顕）

(1)は長大な木簡で、形状から地面に立てて境界などの目印として使用したと思われる。神社名と見られる「オオクニワケ社」の記載がある。「祓集厄」の記載から厄を祓うために使用されたものと推定される。

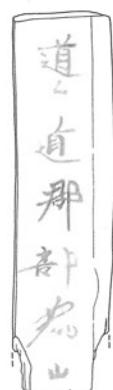
2001年出土の木簡



(6)



(3)



(1)



(2)



(4)



(10)



(8)



(7)



(5)



(9)



111